近森リハビリテーション病院 看護部

副院長兼看護部長　寺山みのり

看護部目標

今年は「多職種協働による退院支援の充実-看護師・介護福祉士の役割を考え実践しよう-」を目標に取り組んだ。

この3年間、新型コロナの影響で、回復期リハ病棟としての退院支援が不十分な状況が続いている。家族が患者の回復過程に直接的に参加することができず、また患者と家族が、在宅復帰に向けた外出や外泊を体験しないまま退院する現状がある。そのため今年は、患者・家族に直接接触して行う介護指導を積極的に実施した。

第8波の影響により、院内クラスターの発生やコロナユニットの開設、病棟間の応援スタッフの調整等で、担当患者のプライマリーナース・ＣＷとしての関わりは不十分となったが、多職種チームで協力して介護指導を実施した。

実施基準は、高知県のCOVID-19感染対応目安「警戒レベル」までとし、原則1対1の指導で、予約枠40分（1回の指導時間20分・前後の準備・片付け各10分）という短時間で実施した。

予約枠のルームの使用をもって介護指導の実施件数を把握した結果、一年間の実施件数は延べ179件、対象患者は90名であった。感染対応目安「注意レベル」以下で病棟の個室を使用して実施した件数は把握していない。

今回の介護指導は、患者と家族が互いの「実際を知る」ことから始まり、短時間の指導を実現するために多職種の役割分担を明確にして実施した。事前に患者の動画や静止画を活用した個別性の高い介護手順を家族に提供し、家族が予習・復習に臨む準備も行った。また、指導は多職種が交代しながら実施し、患者と家族の反応を繋いで皆で共有した。本来であれば介護指導は早期から回数を重ね、家族の理解度を確認しながら進めるものであるが、感染状況にも左右され、10日以上連続の指導を必要とする事例もあった。今回は、自宅の生活で困る必要最低限の指導になったが、指導を通して患者・家族と生活上の課題を共有し、意思決定を促す重要な機会であった。

法人内研修ローテーションの実施

看護師の主任とリーダーを対象に9月から2月末まで半年間の研修を実施。

当院から近森病院（一般病棟）に1名、オルソリハ病院（回復期リハ病棟・地域包括ケア病棟）に2名が異動して研修し、近森病院から2名を受け入れた。

その他、看護部の主な活動報告

資料1 医療安全委員会
資料2 感染対策委員会
資料3 看護部教育委員会
資料4 地域連携室報告

近森リハビリテーション病院　医療安全委員会（資料 1）

副看護部長　岡村奈保

はじめに

患者に信頼される医療サービスの提供と医療の質向上を求めていくことを医療安全委員会の基本姿勢として活動を行っている。基本姿勢に基づき医療安全活動の必要性・重要性を院内の全部署及び全職員に周知徹底し院内共通の最重要課題として取り組みを行っている。

活動内容

- インシデント・アクシデント事例の共有、および医療安全カンファレンスの開催によりインシデント・アクシデント要因の振り返りを行い同じ事故または、重大事故につながらないための情報発信を行っている。
- 研修会の開催により、医療安全への意識向上を行っている。

（研修会内容）

＊2022 年 5 月『医療安全報告のすすめ』インシデント報告の意義と報告のすすめ
＊2022 年 10 月『離院発生時の対応』離院防止、離院発生時の対応を確認する
＊2022 年 10 月『回復期リハと漢方薬』漢方薬の知識・薬剤の使用注意点について学ぶ
＊2023 年 2 月『2022 年医療安全の振り返り』医療安全報告件数、転倒・転落アクシデント、離院発生状況の報告

まとめ

2022 年度医療安全目標を昨年度から継続して『転倒による損傷(骨折)が発生しない』『インシデント報告件数を増やす』を挙げ取り組んだ。

転倒件数は、昨年より若干増加しているが、『転倒による損傷(骨折)が発生しない』に関しては、転倒による骨折が 1 件、増加はしていない。損傷率※2（事象レベル 3b 以上）では、昨年（0.08‰）と比較して 0.02‰と減少している。研修会の開催、毎月の転倒発生状況の共有による転倒防止への意識付けを行った。

	2022 年	2021 年	全国平均：日本病院会 2021 年データ
転倒率※1	4.17‰	3.93‰	2.82‰

転倒率※1：転倒・転落発生件数　×1000（‰）
のべ入院患者数

損傷率※2：事象ﾚﾍﾞﾙ 3b 以上発生件数×1000(‰)
のべ入院患者数

『インシデント報告件数を増やす』に関しては、昨年 697 件の報告があったが、2022 年は 756 件と増加している。報告しやすいシステムを検討し、パソコン入力だけではなく、気づいたこと、小さいことも報告できるように手書きの書式を作った。部署及びユニットにより報告件数に偏りがあるが、手書き報告書ですぐに報告書が作成できることから若干の報告件数増加につながった。今後も継続していく予定。

2023 年度に向けて

- 転倒によるアクシデント減少
- インシデント報告件数増加
- 患者間違いが起きない（全患者フルネーム確認）

近森リハビリテーション病院　感染対策委員会（資料 2）

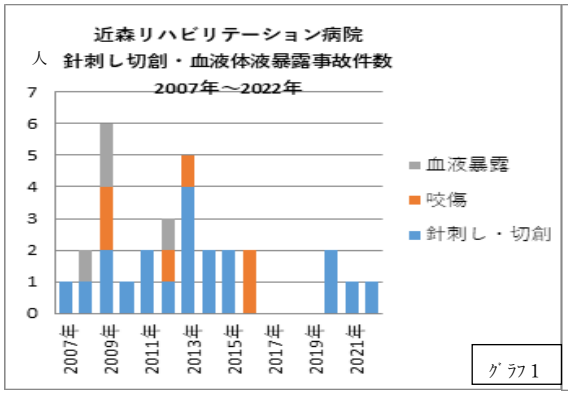
シニア看護師長　増田千恵

委員会活動及び ICT の取り組み

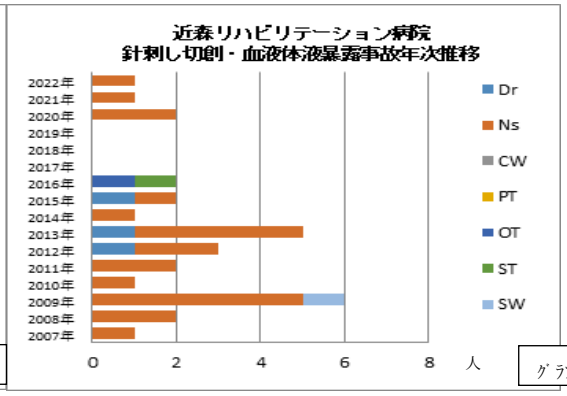
・感染防止対策加算 1 にかかる医療機関との年 4 回の合同カンファレンスを 2022 年は 4 月の時点で加算を取ることを取りやめたため不参加。9 月から加算 3 を取るように申請したため 3 回の参加となった。3 回テーマとしては、新型コロナウイルスアウトブレイク発生時の初動訓練。手指衛生向上に向けた取り組みについて。一年間の抗菌薬使用状況の評価と次年度の合同カンファレンスにつてを実施した。
・ICT ラウンドの実施（各病棟 1 回/W　病棟以外は 1 回/M）各部署に報告及び改善案の提出。
・院内抗菌薬の適正使用の監視（使用理由　腎機能　細菌培養　TDM の結果など）。
・ICT ミーティングでの抗菌薬使用状況、適正使用報告、その他検討事項など。
・週報の配信（医局員　各所属長や責任者、主任、リンクスタッフなどに配信して下部まで伝達）。各部署での分離菌の報告や各ユニットで注意すべき耐性菌の保菌者の報告、抗菌薬の使用状況、近森会グループ内及び高知県の感染症情報、リハ病院内での職員及び家族の感染症情報、近森会グループ保育室の感染状況の等報告。
・感染対策マニュアルの追加及び改定。
・年 2 回全職種対象感染対策セミナーの開催（テーマは、サラヤ感染対策セミナーから「地域医療・高齢者福祉施設への COVID-19 対策支援~行性との連携～」「新型コロナウイルス感染症に関する特別公演①COVID-19 の臨床像、画像、経過　②感染対策について」）
・月別耐性菌発生患者の把握（MRSA　MSSA　P.aeruginosa ESBL　MDRP　PRSP　BLNAR　CD-T　メタロ－β－ラクタマーゼ酸性菌　AmpC 産生菌　CRE　VRE　など）。
・手指衛生サーベイランス（速乾性手指衛生剤の使用量からみた一人当たりの 1 日使用回数）。
・リンクスタッフによる職場巡視。
・針刺し切創、血液体液暴露事故防止。
・洗浄、消毒、滅菌、リネン管理、感染廃棄物、感染対策物品の検討
・各部署やリンクからの相談対応、Zoom 等による院外研修参加
・新型コロナウイルス感染症対策

針刺し切創、血液体液暴露事故について（グラフ 1・2 参照）

2021 年に 1 件針刺し事故が発生し注意していたが 2022 年も 1 件の針刺し事故が発生した。この事故は、新人看護師がインスリン注射後にフレックスペンから針を取り除く時に事故が発生した。新人看護師は、前日に実地指導者にインスリン注射の一連の仕方をオリエンテーションしてもらい実際を見学した。当日、実地指導者の見守りのもと、実際に患者にインスリン注射を行い針除去器具で針を除去しようとしたところ、力の入れ具合がわからず力が入りすぎアダプターの継ぎ目が外れ事故に至った。原因は、見学だけで実際に針除去の訓練が一度もできてなかった事が原因と考える。オリエンテーションをするなら見るだけにとどまらず、実際に物品を用いて訓練をしてから実践することが重要であると考える。



グラフ 1

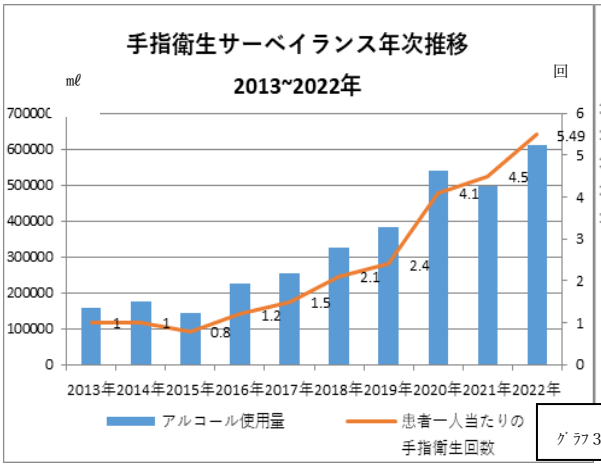


グラフ 2

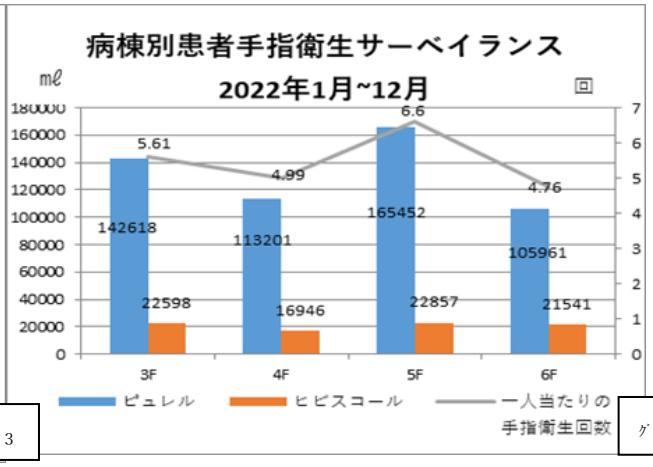
また当院の針除去方法が 2 つあり実地指導者は、自身が気に入っている方法だけを指導するだけでなく、いずれの方法も指導して最終的に本人がやりやすい方法を選ぶべきである。

手指衛生について（グラフ 3・4 参照）

手指衛生では、速乾性手指衛生剤の使用量や手指衛生サーベイランス、手指衛生の直接観察法を実施すべきである。しかし 2022 年は、直接観察法をすることが全く出来ない。2017 年から直接患者に接触する職員は、手指衛生剤の携帯を推奨している。ｸﾞﾗﾌ 3 参照 2013 年から使用量の年次推移は明らかに右肩上がりである。2022 年の一日 1 人当たりの患者に対する手指衛生の回数は 5.49 回と前の年よりも 1 回増加した。2022 年は、目視による手指衛生の観察を実施する時間が無く病棟別でのアルコール使用量と 1 患者あたりの手指衛生実施回数をグラフ 4 で示す。このｸﾞﾗﾌから言えることは、5F 病棟が使用量、回数とも多いが、これは、7 月 5 階病棟でコロナのクラスターが多数発生したことが影響したのではないかと考える。アルコールの携帯はラウンド時チェックするとほとんどの職員が持っている。しかし、手指衛生のタイミングを見ると患者に触れた後の手指衛生の実施率は高いが、手指衛生した後にマスクやユニホームに触ってその後手指衛生なしに患者に触れるなど手指衛生のタイミングが十分理解できてない職員がいるので今後も継続して指導が必要である。



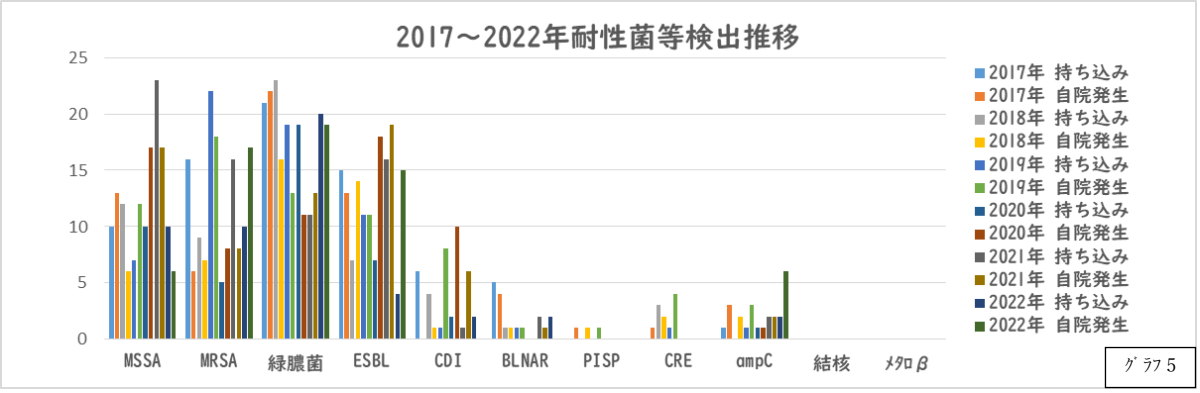
ｸﾞﾗﾌ 3



ｸﾞﾗﾌ 4

耐性菌の検出について（グラフ 5 参照）

2022 年 MSSA は、自院発生 6 件　持ち込み 10 件　総数では一昨年よりも 24 件減少。MRSA は、自院発生 18 件　持ち込み 7 件と自院での発生が多かった。また総数では、昨年とほぼ同じ数であった。緑膿菌は、2021 年と比較すると約 2 倍近く増加。持ち込みも自院発生も増加していた。ESBL は、2021 年と比較すると 10 件ほど減少していたが相変わらず陣に来てからの発生が多い。CD-T については、持ち込み 2 件のみで 2021 年の 1/3 に減少。BLNAR は、2 件あったがすべて持ち込み。CRE は、2020 年から 1 件も検出が無い。この他、AmpC 産生菌 8 件と増加。内訳は持ち込み 2 件自院発生 6 件。2021 年も 5 件あったが、自院発生の患者では、入院して間もなくの検出では無く何カ月か経っての検出が多かった。これらの結果については入院時、全患者に対して培養検査を実施してないのは例年通りだが、増加傾向の細菌もあれば減少傾向の細菌もある。今後も件数を把握しながら手指衛生の徹底や標準予防策、経路別予防策等の実践・指導していく。



ｸﾞﾗﾌ 5

インフルエンザについて

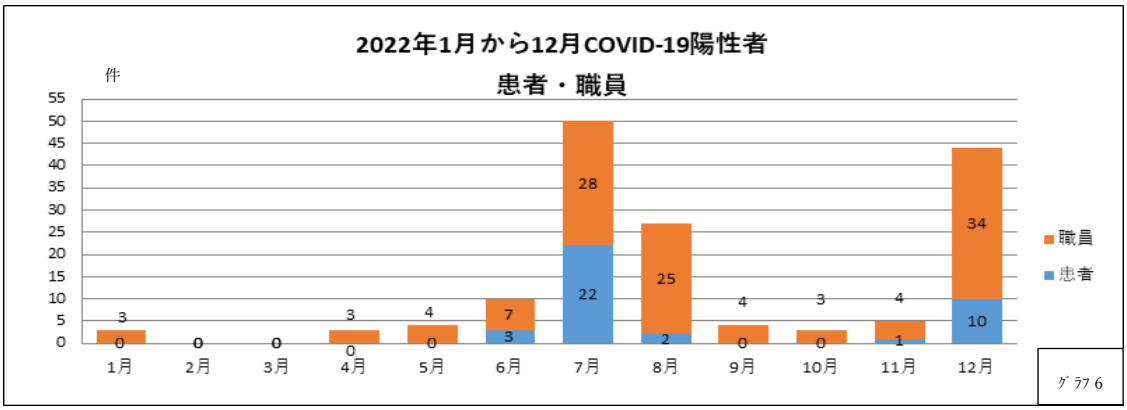
インフルエンザの罹患報告数では、2021 年冬季から 2022 年 12 月末までの発生はなかった。これは、新型コロナ感染症対策による感染対策が効を奏しているからであろう。

疥癬について

2020 年から疥癬の発生はないが、皮膚科受診していても改善傾向が無く激しいかゆみなどがあれば感染制御部も注意していく必要がある。

新型コロナウイルス感染症対策について(グラフ 6 参照)

2021 年は患者からコロナ陽性者は無く職員が 2 件であった。2022 年は、ｸﾞﾗﾌ 6 を見てもわかるように一年間でコロナ陽性者が患者 38 件、職員 115 件の報告があった。そのうち、患者は 6 月、7 月、8 月、11 月、12 月に発生した。職員は 2 月、3 月を除くすべての月で発生があった。陽性者の発生が一番多かったのは、7 月で職員及び患者合わせて 50 件あった。5 階病棟ではクラスターが発生しその内訳は患者 22 件、職員 23 件。後の 5 件はクラスター以外の陽性者で職員。とにかく 7 月のクラスター発生では、患者を診る職員が不足し他の階からの応援や近森病院本院からの応援、セラピストの応援を受け凌ぐことができた。8 月以降、患者や職員が罹患することはあったが 7 月のような大量発生はなかった。5 階のクラスター発生で新型コロナ感染対策の実践が訓練となった。この他、8 月高知県の要請を受け発熱外来を開設、9 月コロナ病棟も 20 床開設した。自院にコロナ病棟ができた事でリハビリ病院内での患者発生があってもコロナ病棟に入院させること感染の広がりを回避できた。リハビリ病院での重症例数件については、別病院のコロナ病棟で治療してもらい死亡例はなかった。今後 5 類になっても新型コロナ感染症が無くなるわけではない。引き続き全国及び地域の流行状況や動向を見ながら対処方法も変化させつつ職員全体で対応していく。新型コロナワクチン接種に関しては、2021 年の 1 回目接種から希望する職員や入院患者への接種を継続している。



ｸﾞﾗﾌ 6

近森リハビリテーション病院　看護部　教育（資料 3）

教育担当シニア看護師長　中村里江

１．新人看護師教育担当者会活動

１）活動実績

当院に入職した新人看護師のジェネラリスト教育と他院から入職してきた既卒看護師および介護福祉士も含めて回リハ病棟である当院の病棟業務にスムーズに適応できるための教育支援を主な目的としている。2022 年度の新人看護師は 3 名、既卒入職者は 8 名（5 名：他院からの既卒入職看護師、3 名：既卒入職介護福祉士)、合計 11 名を対象に集合研修と 0JT を企画運営した。

（１）集合研修

当院では毎年下記に示す 2 つのプログラムで集合研修を実施している。

①ラダーレベル I 研修（クリニカルラダーレベル I を目指すためのジェネラリスト教育）

このプログラムは新卒新人看護師を対象とし、新人教育担当者会の委員（看護師）が講師を担当している。新人看護師が 3 名と少人数であったため、ディスカッションに重きを置くテーマの研修では参加人数を確保する目的も兼ねてオルソリハビリテーション病院と合同で開催した。

昨年度同様に研修効果を高めるため、e ラーニングを補助的に取り入れた。

②回復期リハビリテーション新人看護師研修

このプログラムは、新人看護師を含め回復期リハビリテーション病棟入職 1 年目のスタッフを対象とし、当院の回復期リハビリテーション看護師（回リハ病棟協会認定）が主に講師を担当した。

①②両プログラムとも、新型コロナウイルス感染拡大によるクラスターの発生で、若干の日程変更を行ったが、ほぼ計画通りに実施することができた。

（２）0JT

新人看護師、および既卒新入職員の現場への適応状況を委員会で共有し病棟管理者とも情報共有しながら支援を行った。毎年のことであるが、回リハ病棟のケアの特徴として点滴や処置などの医療的技術を体験する機会が少なく、1 年目の看護師の技術習得が遅れがちになることから、新人看護師技術チェックリストを用いて 3 か月ごとに到達度を把握し、未経験の技術項目を早めに把握することで優先的に技術体験ができるよう病棟の 0JT を強化した。

2022 年度の集合研修実績を表 1 に示す。

２）評価と課題

技術チェックリストを用いて 3 か月ごとの評価を行ったことで未経験の技術習得のための 0JT や集合教育を教育担当者が早めに企画することができ、新人看護師は年度末には 1 年で到達すべき技術をすべて習得することができた。次年度以降も同様の体制で技術教育を継続する。集合教育の時間短縮を図りかつ学習効果を上げるために e ラーニングを予習的に活用する計画

であったが、新人の受講実績を確認すると、いくつかコンテンツをまとめて年度末に受講する形となっていた。コロナ感染拡大に伴うクラスターの発生など、現場の業務環境が厳しい時期が続いたことでｅラーニングの受講が時間的に厳しく負担が大きかったとの感想もあったことから、次年度のコンテンツと受講時期や方法について検討する必要がある。

既卒入職看護師・介護福祉士は回リハケアの新人看護師研修プログラムをほぼすべて受講することができた。2022 年度は例年になく既卒看護師の入職が多かった。経験を持っている看護師でも、回リハ病棟のシステムやケアの特徴について学ぶことで不安を軽減し当院のケア業務にスムーズに適応できる一助となったようである。途中離職する者はいなかったが、現場での困りごとなどを把握できていなかったため、今後の既卒入職者への OJT を工夫するうえで、当事者からのニーズ把握も必要と考える。

２．近森リハビリテーション病院看護師教育委員会

8 名の委員のうち、半数の 4 名は近森会グループ看護部教育委員会の委員を兼任している。

■近森会グループ看護部教育委員会活動

１）活動実績

当院から 4 名の教育委員が近森会グループ看護部教育委員会のクリニカルラダー研修の運営に参加している。今年度はラダーレベルⅡ「事例検討会」「看護過程」「ケース発表会」、レベルⅢ「退院支援」研修の 4 つの研修グループに各委員が所属して研修企画・運営・評価を行った。

２）評価と課題

教育委員はクリニカルラダーとその研修活動について学ぶことができ、当院での教育活動や自部署でのラダー研修受講促進活動に活かすことができている。集合研修の企画運営だけでなく、受講者が作成したレポートを査読する作業も行っている。業務量的には負担が大きいが、2 年の任期を終えると、自身のレポート作成力や後輩指導力の向上にも役立つ活動となっている。

■近森リハビリテーション病院看護師教育委員会活動

１）活動実績

今年度は昨年度の 3 つのテーマ（①急変時の対応、②急変に至る兆候への対応、③抑うつの看護）に④認知症ケアを追加して計 4 つのテーマで集合研修を企画した。

コロナ感染の第7波、第8派によるクラスター発生のために看護師の業務環境が厳しくなり、当院内の委員会活動に充てるマンパワーと時間が制限される中で思うように計画を進めることができなかったが、委員がこつこつと企画・準備を行い、それぞれテーマについて集合研修を行うことができた。

①「急変時の対応」については、シミュレーション研修を行うことを目的に、その教材として、多職種が参加した急変対応シーンの動画を作成する活動を行った。昨年度にある程度を終えていたが、編集過程で追加修正の必要性が生じ、ひきつづき動画作成活動を行った。

②「急変に至る兆候への対応」

当院の経験年数の浅い看護師を対象とした内容で集合研修を行った。講師には近森病院の脳卒中認定看護師を迎え、当院のケアの現状に即した内容で研修を行った。

③「抑うつの看護」

例年同テーマで集合研修を行っているが、今年度は、当院で使用される薬剤について当院の薬剤科長を講師に迎え、研修を行った。

④「認知症のケア」

当院の入院患者へのケアの現状から、認知症ケアも重要なテーマと考え、今年度急遽追加した。講師は認知症ケアについて詳しい看護師長に依頼し、講義内容を録画してできるだけ全スタッフが繰り返し視聴できる形で実施した。

2022 年度の集合研修実績を表 2 に示す。

２）評価と課題

「急変時の対応」については教材動画を個人レベルでも繰り返し視聴できる構成にするために編集作業を行ってきた。次年度にはこの動画を活用したシミュレーション研修を行う予定である。急変に遭遇する機会が少なく、ベテラン看護師でも対応や技術に不安を持っていることから、そのような不安解消にもつなげられるような勉強会を企画していきたい。

「急変に至る兆候への対応」研修では、脳卒中の再発の兆候とその観察方法を中心にした内容であった。若手看護師をターゲットとした内容で企画し受講促進活動も併せて行った結果、期待以上の受講者が集まった。院内での脳卒中再発への対応力を高めるための研修として今後も継続していく。

「抑うつの看護」では、日ごろ使用する薬剤について、看護師に事前の研修ニーズ調査を行い、研修内容に反映するよう講師に事前に依頼した。ケア対象である患者の心と薬の理解にもつながる内容ということで、介護福祉士の参加も得られ、受講者の満足度も高かった。

「認知症ケア」研修については、看護部職員だけでなくリハビリテーション部のスタッフも参加する形で繰り返し研修を開催し、ほぼ全員の参加があった。当院は認知症だけでなく脳卒中による認知機能障害を持つ患者さんも多いことから、今後も研修を継続していきたい。

３．近森リハビリテーション病院介護福祉士教育委員会活動

１）活動実績

介護福祉士教育委員が年間の教育計画を立てて教育活動を行った。集合研修のテーマは前年度末の活動評価と現場スタッフのニーズ調査に基づき、教育委員が選定している。また毎年必ず事例検討会を組み込み、病棟スタッフから提供される事例を用いてディスカッションを行っている。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大のために開催日程の調整を余儀なくされた。できるだけ日程を変更することで、計画された集合研修を開催できるようにした。

2022 年度の集合研修の実績一覧を表３に示す。

２）評価と課題

年間の集合研修を計７回計画していたが、第７波、第８波の流行ピーク時期には開催を取りやめ、延期開催とした。年度末までにすべての研修を開催することができず、次年に繰り越したものもあった。講師は主に教育委員が担当するが、次期教育委員の育成も兼ねて、スタッフが担当したものもあった。事例検討会では、参加者が少数ながらも看護師の参加もあった。他

病棟での実践事例を共有できる貴重な機会として好評を得ており、参加者だけでなく事例提供したスタッフにとっても気づきや学びを得られる機会となっている。事例検討会は長年継続して行っており、介護福祉士の間では定着しつつある。今後は得られた実践知を可視化して蓄積していく取り組みにも着手できたらと思う。

４．看護補助者教育

１）活動実績

新型コロナウイルス感染状況が収まらない中で、現場での患者の生活環境を整える業務や身体介助業務も実施することから、昨年度に引き続きコロナ感染対策の手順を周知徹底することを目的に OJT を実施した。

２）評価と課題

専門職ではないものの感染対策の基本的知識については職員対象の必須研修を定期的に受講しながら感染対策手順を業務に反映できるよう ICN が教育支援を行うことで、自身の健康管理を含め、感染対策の手順を遵守した日常業務を継続できている。

集合研修実績一覧

表１　新人看護師研修

	開催月	テーマ	講師
新人看護師研修（ラダーレベルⅠ）	4 月	入職時新人研修	
	5 月	点滴静脈注射技術研修	教育担当者
	6 月	放射線・検査・システム・図書・夜勤について	
	6 月	急変時の対応①（BLS）	新人教育担当者
	7 月	急変時の対応②（ハートコール）	新人教育担当者
	9 月	褥創ケア	WOC 認定看護師
	10 月	看護倫理・社会人基礎力	教育代表者
	10 月	多重課題研修	新人教育担当者
	11 月	看護過程・ケースレポートの書き方	教育代表者・新人教育担当者
	12 月	急変時の対応③（急変に至る兆候への対応）	新人教育担当者
	1 月	点滴静脈注射技術評価研修	新人教育担当者
	2 月	看護要約の書き方	回リハ看護師（認定）
	2 月	振り返りの会	教育代表者・新人教育担当者
	3 月 31 日	ケースレポート提出	
新人看護師研修（リハビリテーション看護）	4 月	近森リハビリテーション病院新入職員研修	近森リハビリテーション病院教育研修委員会
	5 月	摂食嚥下障害の看護 排尿のケア	回リハ看護師（認定） 実地指導者

	5 月	回復期リハ病棟の基本的ケア①～⑥ 排便のケア	回リハ看護師（認定） 実地指導者
	6 月	脳卒中の観察のポイント	回リハ看護師（認定）
	9 月	回復期リハ病棟の基本的ケア⑦～⑩	実地指導者
	10 月	回リハ病棟における看護過程	回リハ看護師（認定） 実地指導者
	11 月	うつの看護	精神科　看護師
	12 月	日常生活機能評価研修	看護主任
	2 月	高次脳機能障害の看護	回リハ看護師（認定）

表２　看護師教育委員会勉強会

月　日	テーマ	講師／担当
2 月 13 日	急変に至る兆候とその対応 ―脳卒中再発の兆候とその観察―	徳留裕也　看護師 （近森病院　脳卒中認定看護師）
12 月 29 日	抑うつの看護 ―抑うつに関わる薬剤について―	中野克哉薬剤科長 （薬剤師）
11/24～12/1	認知症ケア	武市看護師長

表３　介護福祉士教育委員会勉強会

月　日	テーマ	講師／担当
4 月 25 日	急変時の対応について	5 階・6 階病棟　教育委員
5 月 31 日	家庭訪問について	平田　翼　介護福祉士
6 月 28 日	事例検討会	4 階病棟　介護福祉士
10 月 25 日	コミュニケーション	明坂洋介　介護福祉士
11 月 29 日	事例検討会	3 階病棟
2 月 28 日	回リハ病棟における基本的ケア「排泄」	西川智恵子　介護福祉士
3 月 28 日	認知症患者への対応について	楠瀬正也　介護福祉士

2022 年度　学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
コロナ禍における介護指導実施への取り組み	岡本真由美	2022 年度近森会グループ学術集会	2022.8.6

講演・外部講師

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
看護介護ケア 10 か条の意味	岡本真由美	回復期リハビリテーション病棟協会認定コース	2022.9.1
看護介護ケア 10 か条の意味	岡本真由美	回復期リハビリテーション病棟協会認定コース	2022.9.27
退院支援	中屋吉博	回復期リハビリテーション病棟協会　介護福祉士研修	2022.12.6

シンポジスト・座長・ファシリテーターなど

演題		学会名	開催
自立支援	岡本真由美	回復期リハビリテーション病棟協会 PT・OT・ST 合同研修	2022.2.6

院外活動（外部委員・役員等）

団体名	委員・役員	氏名	期間
一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会	看護委員会委員	岡本真由美	2021.5～
高知女子大学看護学会	学会誌査読委員	中村里江	2015.4～
高知県口のリハビリテーション研修会世話人会	世話人	植田彩子	2013.5～
高知県歯科衛生士会	会長	植田彩子	2015.6～2022.5
高知県歯科衛生士会	理事	中岡朋世	2015.6～2022.6

看護学校等　非常勤講師

学校名	指名	講義名
近森病院附属看護学校	岡部美枝	成人看護学援助論Ⅲ
近森病院附属看護学校	中村里江	リハビリテーション概論

近森リハビリテーション病院　地域連携室（資料 4）

シニア看護師長　岡部　美枝

入院相談件数・病床稼働率

入院相談件数の合計は 866 件と前年と変わらなかった。(図1)(図2)。昨年から引き続き、COVID19 感染症による影響は大きく、当院でも 9 月から COVID19 感染症患者の受け入れ(CU:20 床)を開始。高知県の対応レベルに従い、受け入れ体制を整えた。また、年末からは、高知県全体の医療機関や施設で COVID19 感染症クラスター発生。回復期リハ病棟の退院調整が進まない状況が続いた。そのため、回復期リハ病棟への併行相談対応が続き、お断りやキャンセルの件数も多く、地域連携室対応件数に対して入院件数は減少している。 NASVA の重度後遺症障害者短期入院協力事業での患者受け入れについても、COVID19 感染症流行時期にお断りするケースも発生している。そのような中、近森病院・オルソリハ病院の連携部門と連携し、患者の受け入れ調整を行った。

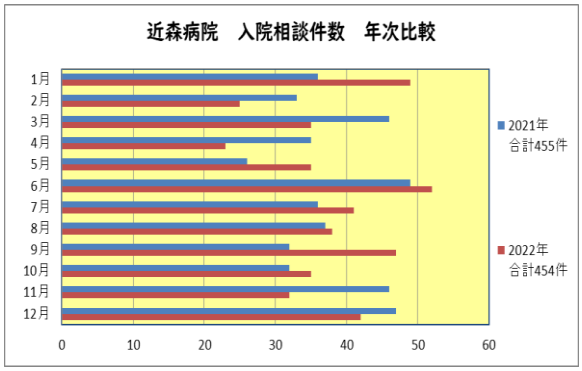


図1　入院相談件数(近森病院)

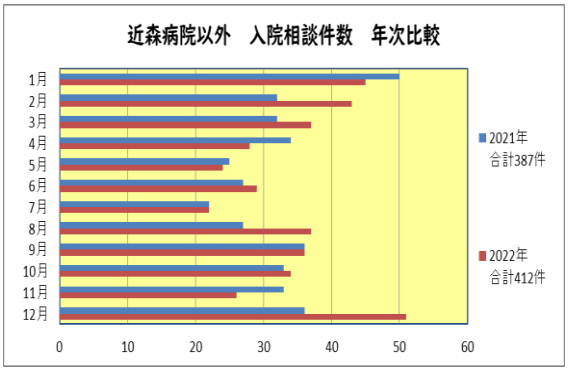


図2　入院相談件数(近森病院以外)

2022 年診療報酬改定により、日常生活機能評価重症患者受け入れ割合は、4 割に引き上げられた。自立度の高い患者の入院日数の短縮化により、軽症患者の受け入れ件数が増える中、病棟管理者のベッドコントロールの協力もあり、平均 42.5%とクリアできた。実績指数についても厳しい状況が続いたが、入院料 I の基準をなんとかクリアできている。在宅復帰率、日常生活機能評価改善率などは、データ管理を行いクリアできた。2023 年はオルソリハ病院と近森病院の病床編成が予定されている。整形外科患者の受け入れ件数が増えることは間違いないため、各要件の数値を短期間でチェックし、対応していきたい。

2023 年 5 月からは COVID19 感染症が 5 類となり、感染対策も変化してくる。様々な制限がある中で、受け入れ・退院支援に取り組んできた。今後、各部門の体制の変更など情報収集をしっかりと行い、当院として患者の受け入れがスムーズに実施できるように連携を撮っていきたい。

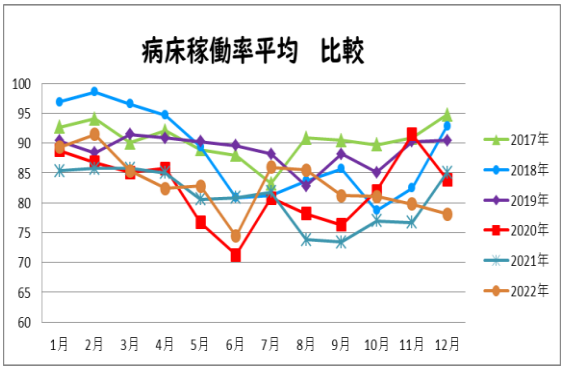


図３：病床稼働率平均比較

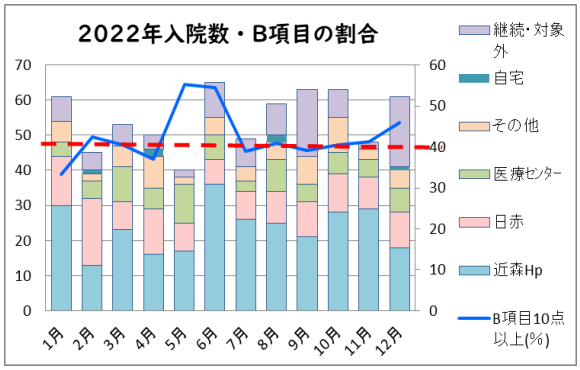


図４：入院数・B 項目 10 点以上の割合

課題

- オルソリハ病院と近森病院の病床編成の予定。患者割合が変わってくるため、各要件の数値を

短期間でチェックし、対応していく。

- COVID19 感染症対策の変更点を把握し、患者・家族・スタッフからフィードバックをうけながら検討する。
- 近森病院・オルソリハビリテーション病院との連携を継続し、患者のスムーズな受け入れ調整を行う。
- 病院訪問や高知県回復期リハビリテーション病棟協会、脳卒中連携パス合同会議など、他院との連携を積極的に行う。（現地開催での顔の見える連携）